

## 茂吉における白秋的語句との離別：『梁塵秘抄』受容を視座に

前田，知津子  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24639>

---

出版情報：Comparatio. 15, pp.54-64, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

## 茂吉における白秋的語句との離別

### ——『梁塵秘抄』受容を視座に——

前田知津子

#### はじめに

斎藤茂吉は、第一歌集『赤光』の後期から大正三年、四年にかけて、あらたな歌境を切りひらこうとあらゆる試みを行うが、やがて、その試みにおいて製作された作品のうち、ある種の歌が気に入らなくなる。大正一〇年一月に刊行された第二歌集『あらたま』巻末の「あらたま編輯手記」（大正九年一〇月執筆）に、「大正三年あたりに作つた漢語や仏典語まじりの歌は、大正六年の夏には既にいろいろの氣に入らなくなつて居た」「大正六年には自作の歌に對しながら既に厭で厭でなくなつた」などと記している。

『梁塵秘抄』の積極的受容もこの時期の試みの一つとして位置づけられる。茂吉を秘抄影響歌人のひとりとして取り上げた新聞進一は、前記の「大正三年あたりに作つた漢語や仏典語まじりの歌は、大正六年の夏には既にいろいろの氣に入らなくなつて居た」との茂吉発言に注目し、『あらたま』初期に顕著であった『梁塵秘抄』撰取を「一時的」なものと見做し、「その後の作にはそれ程影響を及したものは見ないやうに思ふ」と後年の影響を否定した。これに對する荒井源司の反論、そしてそれに新聞が応答した経緯については、拙稿「茂吉の『梁塵秘抄』受容——白秋作品の介在

——」（COMPARATIO, Vol. 14, 2010. 12）で触れたことがある。

荒井は、茂吉後年の作にもその影響は認められると反論したのであった。この議論の発端は、新聞が茂吉を『梁塵秘抄』受容史において捉える立場から「いろいろの氣に入らなくなつて居た」ものの内実を『梁塵秘抄』的要素に帰してしまつたところにあるように思われる。その点に問題はなかつただろうか。そこであらためて「あらたま編輯手記」に茂吉の言をたどってみると、大正六年に施した改作例を示した後に、当時の心境を振り返つて次のように述べた個所がある。

どういふところを主に改めてゐるか云ふに、『ぼつかりと』『生一本の風』『火炎』『ひゆうひゆう』『原つば』などの言葉を改めて居る。かういふ音便や漢語やを織り交ぜた、一種促進して強く跳ね返るやうな言葉は、作つた頃には新しくもあり珍らしくもあつたのであるが、直ぐ飽いたものと見える。『幽かに来るも』といふやうな四三調の結句も既に大正六年頃に飽いてしまつて居る。

ここで注目したいのは、「音便や漢語やを織り交ぜた、一種促進して強く跳ね返るやうな言葉」および「四三調の結句」を改めたと言っている点である。これらを「いろいろの氣に入らなくなつて居た」「厭で厭でなくなつた」などの言が指示する内容と考えてよいであろう。具体例として、『ぼつかりと』『生一本の風』『火炎』『ひゆうひゆう』『原つば』そして「幽かに来るも」の語句があげられている。これらを見ると、特に新聞が注意した「漢語や仏典語」に限るわけではない。あえて特徴を言うとなれば、促音・拗

音・撥音の要素が含まれる語句となるだろうか。「四三調の結句」の例「幽かに来るも」にこれらの要素はない。しかし結句の調を論じる際よく言われるように、三四調とくらべると、四三調は軽妙に響く場合が多い。この点において「四三調の結句」は、「音便や漢語やを織り交ぜた、一種促進して強く跳ね返るやうな言葉」と共通の問題を提起する用法として捉えることが可能である。繰り返しになるが、このように、茂吉が示したわずかな例からだけでも「漢語や仏典語」に限らないことは確認できるのである。新聞は茂吉の発言を『梁塵秘抄』からの離別と判断したが、上記の点を考慮すると、そこには一考の余地があると思われる。

本稿では、新聞の判断の可否を視野に入れつつ、茂吉が「氣に入らなくなつて居た」の言によつて示唆したものの内実を明らかにすることを試みる。具体的には、まず、茂吉が『梁塵秘抄』をどのように捉えていたのかを押さえ、その上で、改作対象となつた語句を検討する。

## 一 茂吉の『梁塵秘抄』理解

茂吉は「76 梁塵秘抄より」(注1)という文章で、『梁塵秘抄』から「好きな歌、句」として三六例を掲出(一詞章全体を掲出した例もあれば、部分的に抽出した例もある)し、その魅力を次のように要約している。

仏典を日本語に翻して微妙に到つてゐる。七五調とそれから雑調を織り交ぜて、なかには独特の有情滑稽フモイシルもあつて、和

歌の潮流とは別途に、徳川の俳諧に通じ、後世俚謡の卑俗を一飛にして明治大正の長詩に交流してゐるやうなところがある。動乱の世にあつて、なほ人心の静寂希望のおもかげは、定家あたりのむづかしいものよりも、此等の直接のものにあらはれて居よう。そして、『こそ哀れなれ』『こそ哀れなりしか』と云つて、奈何に『あはれ』といふ語に愛憐の心を寄せたかが分かる。

新聞はこれを、①經典の和訳の巧みさ、②七五調と雑調の渾融、③独特の有情滑稽フモイシル、④動乱の世の人心の静寂・希望の相を写した事、⑤「あはれ」の語の多いこと、の五項目に整理した(注2)。試みに、茂吉が掲出した三六例中のいくつかを、①から⑤に対応させ、その関心を寄せた詞章を見てみよう。末尾括弧内の上部アラビア数字は茂吉により付された番号であり、下部の漢数字は『梁塵秘抄』番号である。

①に分類される例としては、「原典をやさしく巧みに縮約した歌」(注3)との評をもつ次の詞章がある。

空より華降り地は動き

〔3―五七番歌〕

茂吉は四句からなる詞章のうち一句のみ引用した。当該詞章は、『法華經』の「是ノ時ニ、天ヨリ曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華ヲ雨シテ、仏ノ上及ビ諸ノ大衆ニ散ジ、普仏世界六種ニ震動ス」(序品)による。もう一例引こう。

幼き子どもは稚し 三つの車を請ふなれば 長者はわが子の愛しさに 白牛の車ぞ与ふなる

これは、「時ニ諸子等、各父ニ白シテ言サク、父、先ニ許シタマフ

所ノ玩好ノ具ノ、羊車、鹿車、牛車、願ハクバ時ニ賜与シタマヘ」(譬喩品)による。その他、『法華経』提婆品の釈迦の前身譚に基づいた詞章(「21—二九一番歌」)などにも茂吉は注目している。②の例は枚挙にいとまがない。その中から、著名で多くの注釈をもつ詞章をあげておく。

われを頼めて来ぬ男 角三つ生ひたる鬼になれ さて人に疎まれよ 霜雪霰降る水田の鳥となれ さて足冷たかれ 池の浮草となりねかし と揺りかう揺り揺られ歩け

「27—三三九番歌」

舞へ舞へ蝸牛 舞はぬものならば 馬の子や牛の子に蹴多させてん 踏み破らせてん 実に美しく舞うたらば 華の園まで遊ばせん

「31—四〇八番歌」

この二詞章に漢語は用いられていない。なお、大正三年一月の「アララギ」に掲載された『梁塵秘抄』影響歌群(注4)の中に、「岨をゆく人に追ひつき水わたる足は冷たしといひにけるかも」(初出形)という歌があるが、この一首と、右掲の「27—三三九番歌」との関わりに言及した論考は見当たらない。「足冷たかれ」と「足は冷たし」との間に語句の近似性が認められる点は注意されてよい。

③の例には、「風の生態や運命を歌った奇想天外の作」(注5)、頭に遊ぶは頭風 項の窪をぞ極めて食ふ 櫛の齒より天降る 麻笥の蓋にて命終はる

「32—四一〇番歌」

があり、この影響歌に「潮の上にこらへかねたる河豚の子は眼をあきて命をはりゐる」(初出形、大正三年一〇月「アララギ」)。

下、初出誌が同誌の場合は誌名を略す)がある。

④の例としては、

仏は常にいませども 現ならぬぞあはれなる 人の音せぬ 暁に ほのかに夢に見えたまふ

「2—二六番歌」

読む人聞く者みな仏

「20—二八八番歌」

などがあげられるだろうか。「ほとけ」の語は、「しるがねの雨海中に輝りけむり漕ぎたみとほきふたりのほとけ」(初出形、大正三年一〇月)に認められる。結句を「ほとけ」と詠いおさめる用法は「20—二八八番歌」と一致する。ただし、改作の際にこの語は除かれた。

⑤の例となるのは、前掲「2—二六番歌」の詞章や、

三身仏性具せる身と 知らざりけるこそあはれなれ

「15—二三三番歌」

などである。茂吉の作に例を求めれば「山峽に朝な夕なに人居りてものを言ふこそあはれなりけれ」(初出形、大正三年一二月)(注6)がある。

また三六例のうちには、「うつゝなるわらべ専念あそぶこゑ巖かげより延びあがり見るも」(初出形、大正三年一〇月)と関わりが深く、秘抄歌謡の中でもよく知られた、

遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子どもの声聞けば わが身さへこそ揺るがるれ

「28—三三九番歌」

の詞章も掲出されている。その一方で、茂吉の「入日には金のまざこの揺られくる小磯のなみに足をぬらす」の歌や「ひとり来て

かすかに心の澄むものは一樹<sup>いちじゆ</sup>のかげの莧<sup>あざみ</sup>蕪<sup>わ</sup>ぐさのたま<sup>たま</sup>」(ともに初出形、大正三年一〇月)の歌に影響をあたえた「こゆりさんの渚<sup>なみ</sup>には 金の真砂<sup>まきご</sup>ぞ揺られ来る 梅檀<sup>せんだん</sup>香樹<sup>かうす</sup>の林<sup>はやし</sup>には 付囑<sup>ふぞく</sup>の種<sup>くさね</sup>こそ流れけれ」(四〇一番歌)、「心の澄むものは 秋は山田<sup>やまだ</sup>の庵<sup>いほ</sup>ごとに鹿驚<sup>しか</sup>かすてふ引板<sup>ひた</sup>の声 衣<sup>きも</sup>しで打つ槌<sup>つち</sup>の音」(三三二番歌)などは掲出されていない。これらのことを考慮すると、茂吉の関心の所在を「76 梁塵秘抄より」中の三六例に限定するわけにいかないが、その一端を知るには有益であると思われる。

既述の新聞の判断の根拠となった「漢語や仏典語」という観点に立つと、その三六例中には確かに、「釈迦」「平等大慧」「童子」「菩提」「大樹」「長者」「白牛」「寂寞」「法華経」「僧」「普賢」「菩薩」「娑婆」「迦葉尊者」「龍女」「崑崙山」「三身仏性」「沙羅」「苦行」「若王子」「衆生」「妙法」「博徒」「修行者」などが確認できる。茂吉が気に入らなくなったと記したのは、このような語句だったのだろうか。

茂吉がどのような語を念頭に置いて「音便や漢語やを織り交ぜた、一種促進して強く跳ね返るやうな言葉」と言ったのかについては、先に触れた茂吉自身が示す改作例(八例)によってその一端をうかがい知ることができる。それを考察の手がかりとして以下の論をすすめる。

## 二 改作の具体例

### 1 「あらたま編輯手記」中の改作例

茂吉は改作例として、次の八例を「あらたま編輯手記」中に示した。

- (1) ぼつかりと朝日子<sup>あさひこ</sup>あかく東海<sup>とうかい</sup>の水<sup>みづ</sup>に生れてあたりけるかも  
(原作)
- ゆらゆらと朝日子<sup>あさひこ</sup>あかくひむがしの海<sup>うみ</sup>に生れてあたりけるかも  
(改作)
- (2) いちめんにふくらみ円<sup>まる</sup>し粟<sup>あは</sup>ばたけ疾風<sup>はやかせ</sup>とほる生一本<sup>きいっぽん</sup>のか  
(原作)
- いちめんにふくらみ円<sup>まる</sup>き粟<sup>あは</sup>煙<sup>えん</sup>を潮<sup>しほ</sup>ふきあげし疾風<sup>はやかせ</sup>とほる  
(改作)
- (3) 海浜<sup>かいひん</sup>に人出で来りゆふ待ちて海の葉<sup>くすり</sup>ぐさ火炎<sup>くわえん</sup>に焼きあ  
(原作)
- いくたりも人出で来りゆふ待ちて海の葉<sup>くすり</sup>草<sup>くさ</sup>に火<sup>ひ</sup>をつけに  
(改作)
- けり  
(改作)
- (4) ひゆうひゆうと細篁<sup>ほそたかむら</sup>をかたむけし風<sup>ふう</sup>ゆきてなごりふかく澄<sup>さや</sup>みつも  
(原作)
- ひとむきに細篁<sup>ほそたかむら</sup>をかたむけし寒<sup>さむ</sup>かぜのなごりふかくこも  
(改作)
- りつ  
(改作)
- (5) 原<sup>はら</sup>つばに絵<sup>え</sup>をかく男<sup>おとこ</sup>ひとり来て動くけむりを描<sup>か</sup>きにけるかも  
(原作)
- 冬原<sup>ふゆはら</sup>に絵<sup>え</sup>をかく男<sup>おとこ</sup>ひとり来て動くけむりを描<sup>か</sup>きはじめたり  
(改作)
- (6) かぜとほる櫓<sup>だいじゆ</sup>の太樹<sup>たいじゆ</sup>うづだちて青<sup>あを</sup>の火立<sup>はだち</sup>となりにけるかも  
(原作)

かぜむかふ樺太樹の日てり葉の青きうづだちしまし見て  
居り (改作)

(7) ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子幽かに来る  
も (原作)

つ  
ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子坂のぼりつ  
(改作)

(8) はざまなる杉の大樹の木下闇ゆふこがらしは葉おとしや  
まず (原作)

はざまなる杉の大樹の下闇にゆふこがらしは葉おとしや  
まず (改作)

(1) の改作個所の一つは、先の引用で茂吉が例示していた六例中の一例「ぼつかりと」である。半濁音と促音とからなるこの語句は「ゆらゆらと」に改められた。もう一個所、「東海の水」が「ひむがしの海」に改められている。漢語から和語への改作である。

(2) は、風の表現「生一本のかぜ」が改作された。この語句の「一本(イツボン)」という音は、漢語の「一(イチ)」と「本(ホン)」とが結びつくことで、「イチ」に促音化、「ホン」の語頭に半濁音化が生じて形成される。音数の観点から言えば、「イツボンノカゼ」で定音数の七音を満たしているのであるが、さらに茂吉は「生(キ)」という鋭く響く音を冠し「キイツボンノカゼ」と成句した。この一句は、茂吉自身の言う「音便や漢語やを織り交ぜた、一種促迫して強く跳ね返るやうな言葉」によく当てはまるように思われる。これが削除された。新たに補われたのは、「潮ふきあげし」という風の通り道を示唆する表現である。(3) では、例示

された「火炎」だけでなく「海浜」という漢語も除かれている。

(4) においては「ひゆうひゆうと」が、(5) は「原っぱに」、(7) は「幽かに来るも」の四三調の結句が改作されている。いずれも、前掲の文章で茂吉が記していた個所である。

(6) と(8) の改変個所については、茂吉は特に記述していない。(6) の例には複数の改作個所がある。ここでは第二句「樺の太樹」に注目したい。「太樹」の読みが「ダイジュ」から「フトキ」に改められ、助詞の「の」が次の第三句につづく位置に変更されている。(8) では、「木下闇」が「下闇に」に改作された。この(8) の改作は腰句と呼ばれる第三句にかかわるが、助詞「に」を補うことで体言止めによる句切れを解消している。これは上句から下句への流動性を増すことによつて「促迫」の緩和を意図しての改案であつたと推測される。先には触れなかったが、同様の改作は、(2) の第三句にも施されている(「粟ばたけ」が「粟畑を」に)。既述の(6) の改作も一つには同等の効果を期待してなされたのであろう。

例示されたのは、上記八例にとどまる。改変個所のすべてに言及できたわけではないが、ここで見ておくべき要点は押さえられたはずである。さらに、茂吉が問題とする大正三年作に施された改作を見ておきたい。改作の視野に入っていたのが、茂吉の例示する類の語に限らないことを確認するためである。

## 2 「あらたま編輯手記」以外の改作例

大正三年八月、九月、一〇月の「アララギ」に掲載された作品

について、初出形と『全集』収載の定稿とをくらべてみると、「魂魄」を「魂」に、「海中」を「わたつみに」に、「命をはりある」を「命をはれり」に改めたり、また「大小老若」を除いたり、先の例同様、漢語から和語への改変や漢語そのものを削除した例などが確認できる。ここでは、それ以外で改作の対象となった作品を六例（注7）あげる。

（1）たいぼくの橡のあたまは風のなか嫩葉たふとく諸向きにけり  
橡の太樹をいま吹きとほる五月かぜ嫩葉たふとく諸向きにけり  
（初出）  
（全集）

（2）この朝けひた急ぐ土の土龍わが諦念は色なありそね  
この朝明ひた急ぐ土の土龍かなしきものを我見たりけり  
（初出）  
（全集）

（3）昼さがりひとり幽かに来はてつる此処に軍鶏群れかがやきにけり  
はつ夏の日の照りわたりたる狂院のせとの土原に軍鶏むらがれり  
（初出）  
（全集）

（4）空をかぎり円くひろこれる青烟をかがやき上ぼる人ひとり居り  
空をかぎりまろくひろこれる青烟をいそぎてのぼる人ひとり見ゆ  
（初出）  
（全集）

（5）海此岸に童子音すなりうらうらとわがまなこより泪こぼるも  
（初出）  
（全集）

海此岸に童のこゑすなりうらうらと照り満る光にわれ  
入らむとす  
（全集）

（6）いのち守るふたりかがやけり海つべに直つつましく魚くひながら  
妻とふたり命まもりて海つべに直つつましく魚くひにけり  
（初出）  
（全集）

（1）は「あたま」が、（2）は禁止の用法の「なありそ」、（3）は「幽かに」と「かがやきにけり」、（5）は「泪こぼるも」が除かれている。（4）と（6）では、それぞれ「かがやき」と「かがやけり」の語が削除されている。これらの語句は、漢語でもなければ「促進して強く跳ね返るやうな言葉」というわけでもない。このように、「あらたま編輯手記」の中で茂吉が言及していた語句以外に対しても改作が確認できるのである（「幽かに」は、その語句自体が問題にされていたわけではなかった）。

以上、1と2で見てきたような用法や語句を、茂吉はなぜ気に入らなくなったのだろうか。試行錯誤のさなかにあつては気づかなかつたものに時間の経過とともに気づき、それがこの場合、茂吉の芸術観にそぐわなかったということが考えられる。齟齬が生じた理由については、初出形制作当時の作歌における環境を茂吉みずから分析して、「自発的のものが多く、読書により絵画彫刻などを鑑賞したことにより友との交流によつて所働的にもなされてゐる」との発言から推測できる。「所働的にもなされ」とは、内発的でない創作を意味するであろう。このような創作にはやはり

どこか無理したところがあり、結果的に意に添わなくなつたものと思われる。それが改作されてしかるべき対象として茂吉の目に映つたのである。茂吉は同じ文章中に「友との交流によつて」と記している。本稿との関わりにおいて留意しておくべきは、その時期に親しくし互にその作品に一目置いていた北原白秋との関係であるが、両者の交流については前掲の拙稿において述べているのでここでは繰り返さない（注8）。

### 三 茂吉が注目した大正三年の白秋作品

茂吉は大正三年九月の「アララギ」において、同年七月、八月の「文章世界」、八月の「アララギ」に掲載された白秋作品への感銘を表明した。その中から一部抄出する。

大正三年七月「文章世界」より

鬱蒼と楊柳かゞやくまさびしき遠き入江に日の移るなり  
かげ曇る岸の葉柳時折に深くかゞやくなほ堪へられず  
はるばるに波かゞやけば堪へがたし水辺の午後に吹く笛をま

つ  
蘆と蘆幽かに銀のさざなみを立ててかこちぬ今日も暮れぬと  
かくのごとき秋の簡素をわれ愛す枯木一木幽かに光る  
那辺より出て来し我ぞゆく我ぞ背後幽かにかがやき光り  
金の星ひとつ消えゆく思なり童子幽かにいま橋わたる  
吹く風に絶えずよろけてまかがやく金柑の葉にもわれ堪へられず

やはらかに赤きラムプをわが点す涙こぼるゝ安けさの中

同年八月「アララギ」より

網の目に闇浮提金の仏みて光りががやく秋の夕ぐれ  
両の掌に輝りてこぼるる魚のかず掬へども掬へどもまた輝り  
こぼるる

うしろより西日射せればあな寂し金色に光る漁師のあたま  
赤き目に吸はれかがやく鳥のはね遂に飛び入り姿見えずも  
木々の上を光り消えゆく鳥のかず遠空の中にあつまるあはれ  
山峽に橋を架けむと耀くは行基菩薩か金色光に  
金の星時にかがやく岨をゆく彼は枯草負ひたる男

同年八月「文章世界」より

ゆづり葉に光りかゞやく風きたりたちまち騒ぎ消えにけり冬  
あかつきの雪に寂しくきらめくは木々に囀る雀があたま  
魚さげてもて来しお作冬青の木の下にしばらく輝きにけれ  
傍線を付した「かがやく」「幽かに」「こぼるる」「あたま」の語、  
そして「幽かに光る」「かがやき光り」などの結句四三調の用法は、  
茂吉作品中にも見られ、それが改作の対象となっていたことは確  
認したとおりである。

この時期の白秋と茂吉の作品については、「作風の上における歩  
み寄りが、はつきりと感じられる」（木俣修）（注9）との評があ  
るように、ここに示した語句以外にも両者の用語には共通する要  
素が見られる。ただし無論、その語のすべてを茂吉は改作対象と  
判断したわけではない。たとえば、「あたま」を用いた例に「にち  
りんは天に小さし海中に浮び声なき童子のあたま」（初出形、大



正三年一〇月）があるが、この一首中の「あたま」は保存されている。ここには、茂吉の芸術観にそつた選別が働いていると見るべきである。後にこの一首について「此処にも『あたま』がある。

『あたま』といふと好い気持になつたといふほどであるから、乱用したのであつたらう」（注10）と述べている。掲出の例のほか、茂吉に「牛」（大正三年九月「地上巡礼」）、白秋に「馬」（大正四年一月「地上巡礼」）などの「あたま」の用例がある。禁止の辞「な…そ」についてはわずかな参照範囲に見出せないが、それは容易に白秋と結びつく用法であつたと思われる。第一歌集『桐の花』（大正二年一月）の巻頭に白秋は「春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕」の一首を排していた。

以上のように、茂吉が改作対象とした語句は白秋作品に散見される。この点を踏まえて、大正四年八月に刊行された白秋第二歌集『雲母集』をひらくと次のような歌が目に残る。

原つばに狐のかみそりただ赤しわつとばかりに逃げ出すわれは

天を見て膨れかがやく河豚の腹ぼんと張り切る昼ふかみかも  
棧橋にどかりと一本大鮪放り出されてありたり日暮

麦藁帽子野菜の反射いつばいに受けて西日にかがみてあるも  
けつつけつと鳴くは何鳥あかあかと葦間の夕日消えてけらずや  
かうかうと金の射光の二方に射す野つ原に木の二本見ゆ  
鍬下ろせばうしろ向かるる冬の畑そこに真赤な閻魔の反射  
はるばるに枯木わくれば甘諸畑おつ魂げるやうな日が落ちて居る

絹帽吹き飛ばしたり冬の風落日真赤な一本橋に

転がつてゆく絹帽を追つかける紳士老いたり野は冬の風  
山椿照りおそろしき真昼時小僧黙つて坂下りて来も

ほとたりと思ひあまれば地に紅く落ちて音する椿なりけり  
大きな椿ほたりと落ちしなり吃驚するな東京の子供

「原つばに」以下、傍線を付した個所に注目したい。例えば「ぼんと張り切る」「真赤な閻魔の反射」「おつ魂げるやうな」などの表現が見られるが、まさに「促進して強く跳ね返る」効果を發揮する語といえるのではないだろうか。四首目に引用した「麦藁帽子」の歌は白秋がはじめて「アララギ」（大正三年一月）に寄稿した「地面と野菜」中の一作である。

茂吉が「音便や漢語やを織り交ぜた、一種促進して強く跳ね返るやうな言葉」と記したとき念頭に置いていたのは、白秋作品ではなかったか。改作の対象となつているのは、結果として『雲母集』期（注11）に白秋が用いた語句に関わるように見えるのである。しかし、そう見えるのは偶然ではないだろう。改作はある程度意識的にもなされたのではないか。そのことについて述べてみたい。

#### 四 「模倣」をめぐる

大正四年八月の「アララギ」に茂吉は次の文章を発表した。茂吉作品中の語句「いで入る息」が、白秋の「模倣」と難じられたことに対する反論である。

今年一月ごろ『黄に照るや小竹林をそがひにし出で入る息をいつくしみ居る』といふ歌など八首ばかり作つたことがある。突然父上に病氣になられて人身生命の事に就いて深く感じてゐた時の作である。この歌を「アララギ」二月号で発表した当時、或人が葉書を以て此歌の『いで入る息』といふ句は白秋氏の、『麗らかや、出で入る息の、わがのぞとおもへば、息の、麗らかや、はれ。』（白金の独楽）の泥棒である、北原氏を模倣しないなどと広言して置きながら此態たらくは醜いと言つて呉れた。予は恐縮したが此言には服し難かつた。（注

12）

続けて、俊恵法師に当該語句の用例があると応じている。この文章が示すように、茂吉の大正三年、四年の作が白秋作品と似通っていることは当時から言われ茂吉はそれを気にしていた。

大正六年に執筆した「115 かうかう 続き」（注13）という一文では、『かうかう』といふ副詞を歌に用ゐたのは予にはじまることを書いた。白秋氏の雲母集にはこれが多く用ゐられてゐる。みな予よりも後に用ゐた」と述べ『雲母集』中の用例すべて（注14）を列挙し次の点を問題にしている。

『かうかうと風の吹きしく夕ぐれは金色の木々もあはれなりけり』といふ歌は大正三年十月発行の地上巡礼第二号に載つたものであるが、『これらは三崎の旧作なりうめ草に抄出す』と註してあるのはどうか知らんと思ふ。なぜかといふに北原氏の三崎居住時には予の『かうかう』は未だ発表されてゐないからである。（注15）

白秋は、大正三年一〇月の「地上巡礼」発表の自作に「これらは三崎の旧作なりうめ草に抄出す」と付したが、茂吉の文章はそれに異議を唱えた筆致である。もしその通りにこれが三崎居住時代の「旧作」ならば、茂吉の使用よりも早いことになるからである。

その点に関する事実の論及は本稿の課題ではない。今は、白秋の模倣と見做されることに茂吉が承服しかねていたらしいこと、そしてこの文章が「あらたま編輯手記」中で繰り返し記されていた大正六年の執筆であることを押さえておけば十分である。

大正六年の改作は、大正二年から四年にかけての茂吉の試みが一旦落ち着き、それまでの成果を振り返る余裕ができたところになされたものであろう。言わば、みずからの試行に対する自己批判であつた。それは、一時は「自己を見失ふほど」（柴生田稔）（注16）傾倒した白秋との芸術観の相違を確認する作業ともなつたはずである。その過程で、白秋に触発され「所働的に」制作された作品に意識が向かつたのは自然なことであつた。「徒らに他人の模倣をせず、自力で新機軸を出さうといふのは余程むづかしいことである」（「あらたま編輯手記」）と記したとき、茂吉には白秋その人が思われていたのではないだろうか。

白秋の模倣と言われたことは確かに茂吉に影を落としたようである。大正十一年一月に刊行された互選歌集において、茂吉は次のように書かずにはいられなかった。

僕の歌は、『白秋もの』の模倣だと評されたことは一再にとどまらないとおもふ。近くは僕の「あらたま」の前期の作は白秋君の「雲母集」の模倣だなどいはれてゐる。しかし

白秋君の歌は、茂吉の歌の模倣だといふ批評家の言はいまだ聞かないごとくである。(注17)

それに触れた白秋の言を引いておく。「世評などは気にかけないで、どしどし、他の長所には当つて体得した方がいいのである。お互に修業盛りといふ事を忘れてはならない」と述べたあと、

最後に云つて置きたいのは、『北原白秋選集』の序に、斎藤君は同君の歌が白秋ものの模倣だと世間の粗笨な評家が云々すると云つて可なり気を病んでゐる。これは全く私としては気の毒に思ふ。(中略)何にしても同時代に生れ、同じ道に執し、同じく親しく作品を見せ合ひもすれば、歓談もする。かうした間に自然互に影響し合ふといふ事は、敏感である詩人であり、歌人であるほど如何とも為難い事である。(注18)と記している。

## おわりに

本稿では、大正六年に着手された改作によつて茂吉が自作から除こうとしたものの内実を明らかにすることを試みた。改作例を検討した結果、白秋的語句がその対象となつてゐることを確認した。茂吉には、すでに芸術観の相違が明確になつてゐた白秋の作風が意識されてゐたのである。冒頭で述べたように、新聞進一は茂吉の発言を『梁塵秘抄』に対する興味の消失と解釈したが、むしろ、自作の上に痕跡をとどめる白秋的作風への批判として理解されるべきものであつた。

## 〔付記〕

一、本稿における『全集』は、『斎藤茂吉全集』(全三六巻、昭和四八―五一年、岩波書店)を指し、特に断らないかぎり茂吉作品の引用は同集によつた。

一、白秋作品の引用は、特に断らないかぎり『白秋全集』(全三九巻・別巻、一九八四―一九八八年、岩波書店)によつた。

一、本稿で引用した短歌作品のうち初出形については、特に断らないかぎり、茂吉作品は初出誌にあたり、白秋作品は『白秋全集』収載の初出形によつた。

一、引用文中の文字は適宜通用の字体に改め、傍線は特に断らないかぎり引用者が付した。

## 注

(注1)『全集』第九巻「後記」によると、雑誌「掲載状況未詳」の文であり、『童馬漫語』(大正八年八月、春陽堂)初出と推定されている。大正三年執筆の文章中に排列されている。

(注2)日本古典文学全集二五『梁塵秘抄』(校注・訳者 新聞進一、昭和五年三月、小学館)。引用は、昭和五二年七月第三版による。一八三頁。

(注3)完訳日本の古典三四『梁塵秘抄』(校注・訳者 新聞進一、外村南都子、昭和六三年一月、小学館)、四八頁。本稿中の『梁塵秘抄』本文の引用は同書による。

(注4)「秩父山」の題。「据風呂のなかにしまらく目を閉ちてあ  
りがたきかも人の音もせず」「苦行者はとほりけらしもこの水

をいづくし細しといひにけらしも」(ともに初出形)などが秘抄影響歌として指摘されている。同じく秩父行の所産である「時雨」中の一首「ひさかたの時雨ふりくる空さびし土に下りたち鴉は啼くも」(初出形)については後に茂吉みずから、「これなども、やはり梁塵秘抄ばりの一つの変化であつて」とその影響を明かしている。

(注5) 前掲書、二二四頁。(注3) 参照。

(注6) この一首について茂吉は「幾分釈教の歌にながれてゐるやうな情調が出てゐる。『あはれなりけれ』が即ちそれである」と述べている。『全集』第一〇巻、四二〇頁。

(注7) (1) — (3) は八月、(4) は九月、以下は一〇月。

(注8) この時期の白秋と茂吉の交渉については木俣修の「両者が最上の言葉によつて敬礼を交し、親愛の情を通わしているこの事実は両者の歴史の上に特記しなければならないことである」との言がある。「白秋と斎藤茂吉」、「近代短歌の諸問題」(昭和十一年七月、新典書房)、一二九頁。初出は、昭和二十九年一月「短歌」。

(注9) 前掲書、一三七頁。(注8) 参照。

(注10) 『全集』第一〇巻、四一九頁。

(注11) 白秋は「雲母集余言」において、「本集は大正二年五月より三年二月に至る、相州三浦三崎に於ける私のささやかな生活の所産である」(『白秋全集』7、一〇七頁)と述べているが、この際の「雲母集」期は、同集の編集が終わるまでの時期を含意した。

(注12) 「82 言葉のこと」、「全集」第九巻、一一五頁。

(注13) 『全集』第九巻、一六五頁。雑誌掲載状況未詳。大正六年執筆の文章中に排列されている。(注1) 参照。「115 かうかう続き」に「続き」とあるのは、これより先茂吉は、「87 『かうかうと』といふ副詞」(大正四年九月「アララギ」)を書き、「計らず芭蕉の句が機縁になつて『かうかうと』といふ副詞が予の心の中に入つて来たのである」と「かうかう」の「プリオリテート」を主張していた。

(注14) 『雲母集』中に「かうかう」は七首認められる。茂吉がこれを排列順に引用していることから、執筆に際し同集を読み返したことが分かる。白秋の歌の特徴を確認する機会ともなつたであろう。

(注15) 茂吉は白秋の一首を「かうかうと風の吹きしく夕ぐれは金色の木々もあはれなりけり」として引用しているが、初出誌「地上巡礼」、「雲母集」(大正九年三月第四版を参照)ともに結局は「あはれなるかも」となっている。

(注16) 柴生田は、「時雨」(大正三年二月「アララギ」)において「白秋的なものを全く離れた茂吉独自の世界が現出」したと分析し、その理由を「茂吉が白秋との共鳴の間に自己を見失ふほどの状態を閲して来たたまもの」と述べている。『斎藤茂吉伝』(昭和五四年六月、新潮社)、三八七頁。

(注17) 「北原白秋選集」序、「全集」第二五巻、一二三頁。

(注18) 「斎藤茂吉選集序」、「白秋全集」21、二四八頁。